## 2023年度
## 一般財団法人群馬県地方自治研究センター公開セミナー
# 「自然災害に備える～防災・減災のキホンとその準備～」

一般財団法人群馬県地方自治研究センターは、2024 年３月２日（土）午後１時半より群馬県公社総合ビルホールにて公開セミナーを開催し、「自然災害に備える～防災・減災のキホンとその準備～」と題して、二人の有識者による講演と対談を行いました。

2024 年１月１日に能登半島地震が発生しました。被害を受けられたみなさまにお悔やみとお見舞い申し上げます。また、被災者の救済と被災地の復興支援にご尽力されているみなさまに深く敬意を表します。

セミナーのテーマを自然災害に決定したのは 2023 年 12 月でした。直後に能登半島地震が発生しました。まさしく、いつどこで何が起こるかわからないのが自然災害です。備えることはもちろんですが、たくさんの人にお世話になって支えられて今の自分があることを再認識し、毎日過ごしていくことが大切です。

群馬県は比較的、地震や台風による大規模災害が少ない県であるため、県民の危機意識が低くなりがちですが、線状降水帯などによる豪雨災害、また、降ひょうによる災害などはいつどこで起きてもおかしくありません（群馬県では 2023 年に 2 度の大きな降ひょう被害が発生しました。）常に自然災害に対する危機意識を持つことが重要です。

テレビニュースで「集中豪雨の恐れがあるため注意・警戒・避難してください」と緊迫感をもって報道しても、多くの場合、土砂災害などによる人的被害が発生してしまいます。どうして注意を促しても人的被害が起きてしまうのか、危険を自分のこととして受け止められないのか、などを考える必要があります。

このセミナーでは、自然災害に対する危機意識を高めるとともに、災害に見舞われた時に被害を最小限に抑える手段など、明日から使える防災・減災の基本を学びました。地方行政への提言、また、広く市民の皆さまの防災意識向上の一助になればと考えます。

## 講 演「気候変動からみる自然災害
## ～ 今あなたに知ってほしい気象のあれこれ ～」

気象予報士・防災士　　木原　実氏

【司会】　木原様は、大学卒業後、レポーター、声優、小劇場にて活動。1986 年より日本テレビのお天気コーナーを担当。2013 年７月より、一般財団法人防災教育推進協会理事に就任。1995 年、気象予報士資格取得。2004 年、防災士資格取得な

ど、日本テレビの夕方の顔として活躍する傍ら、天気だけでなく、防災についての啓発活動を展開、活躍されております。

それでは、木原様の講演に移ります。

【木原】　今日の演題というのは、お天気と関係ないわけではないのですけども、「気候変動からみる自然災害～今あなたに知ってほしい気象のあれこれ～」という演題に沿ったお話をしたいと思います。まず気候変動といいますのは、今一番言われているあれですね。温暖化、そうです。温暖化、温暖化と言われていますよね。記録的な、日本だけではなく、ヨーロッパも、アメリカも、中国も、北アフリカも全域ですけれども、猛暑になりまして、本当に過去、例がないほど気温が高かったのですが、実はこの冬も異常に気温が高い。お天気の世界、冬といいますと、今年は2月は29日までありましたけれども、12月1日から2月28日までの3か月間、これが気象庁の言うところの冬です。この冬の気温というやつが、もう平年より1.5度高い。ただ、夏と違って、冬、気温が高いというのは、そもそも寒い時期ですから、1度や2度、気温が高くてもそんなに暑いということはないですね。だから気がつかなかったんですけども、異常なほど気温が高いです。それで雪です。雪の量を見ると、今度は日本海側は少ないですね。当然、暖かいわけです。降った雨の量、水の量は多いです。だけど、雪は降っていない。ベースの気温が高いから雨です。雪にならない。異常なんです。

どうしてこんなことになっているのか。昨日、今日、始まったことではありません。世界全体の気温の変化、当然、昔のほうが低いです。今年はもう大分高い。去年までのデータで見ると大分上がっています。やはり温暖化です。では、原因は何か。ＣＯ２と言われていますね。どうしよう。ＣＯ２を出すのをやめよう。石油や石炭を使わない。新しいエネルギー、原子力を使うというふうになっています。けれども、温暖化の原因は、ＣＯ２だけに限ったことではない。メタンガスとか、それから、もっと地下のほうに行くと水蒸気です。水蒸気は人間にはコントロールできないんです。太陽活動があります。今はＣＯ２だけに偏っているという。今、そういうちょっと変わった状況になっていますけれども。ＣＯ２だけが原因じゃないということはもう目に見えていますね。だって、去年、あんなに暑かったけれども、去年、いきなりＣＯ２がめちゃくちゃ増えたわけじゃありません。この10年、気温はめちゃめちゃ高いです。急にＣＯ２が増えたわけではないです。つまり、少なくとも去年の夏から上がっていたというのは、ＣＯ２が直接の影響ではない。つまり、原因はほかにもあるということです。

これが怖いのは、じゃあ、ＣＯ２を全部出さないとなったら、2050年の間にできたからといって、気温が下がる保証はないわけです。ほかにも原因があります。メタンを減らさなきゃいけない。水蒸気をコントロールしないといけない。なかなか難しいんですけれども、ただ一つ、気温が上がっていることだけは証明されています。それによって、実は困ったことが起きている。気候変動ですよね。あ

る意味、高温という。

そこで、実は、皆さん、あまり気づいていないかもしれませんが、国土交通省と気象庁が大きく 2015 年にかじを切りました。どういうふうに切ったかというと、今、日本も新たなステージに入った。今までの災害と比べ物にならないようなことになってきている。国土、都市、人が脆弱化している。そのため防災情報が急激に変化している。土砂災害警戒情報、竜巻注意情報とか、線状降水帯発生。どんどんそういう防災情報が急激に変化せざるを得なくなってきている。

国土交通省の公式の見解ですが、温暖化の進行により、明らかに雨の降り方が変化していると言い切っています。いつ大噴火が起こってもおかしくないという状況。こういったものを新たなステージとして捉え、危機感を持って、防災・減災対策に取り組んでいく必要があるというのが 2015 年に発表された文章です。

この脆弱な国土とか人とか都市というのはどういうことかというと、大昔の人というのは、五感で危険をキャッチしていたわけですが、どんどん、科学的にはこの防災施設が整備されてきましたね。そうすると、守ってもらえることが多くなってきた。そのために自分の体、感覚で危険を捉えるような力が弱くなっているんじゃないか。災害の発生頻度が少なくなってきた。直接被害が減ってきて、だんだん災害が減ったかのように思っている。それで安全性への過信が生まれているということ。行動指南型というような反応の仕方が身についてしまったんじゃないかということなんですね。結果、避難指示が出たら、素直に避難する。ところが、それが逆に、避難指示が出ないんだから避難しないというような捉え方になってしまっている。これでは困るということで、住民自らが状況を情報から判断して、主体的に避難することが不可欠という結論になるわけです。これが新たなステージに対応した防災・減災の在り方です。

本当にそんなに雨の降り方は強くなっているのかと思いますね。非常に激しい雨の降り方。これは 1 時間に 50 ミリを超えると、ニュース等では非常に激しい雨と言います。これは気象庁が決めています。でも、1 時間に 80 ミリを超える雨を何と言うか。猛烈な雨です。猛烈な雨も増えています。これが 50 ミリ以上の非常に激しい雨が降った回数がどういうことになっているか。1 時間 50 ミリ以上、非常に激しい雨はおよそ 1.4 倍に増えている。36 年間。80 ミリ以上の猛烈な雨が 1.7 倍。1 時間に 100 ミリ以上という恐怖を覚えるような雨の降り方は 1.9 倍。激しい雨ほど発生頻度が増えている。ただし、年間に降っている雨の量はそんなに変わっていないです。

地球という、この閉鎖された惑星の中にある水というのは限られています。限られているとむやみに宇宙に飛び出していきません。重力があるから。ですから、急に雨の量が増えるということはないけれども、非常に激しい雨が降る回数というのは増えている。だから、これが怖いんです。災害の要素。原因は何だろうと考えると、いろいろあると思うんですけども、やはり温暖化なのかなというところで見ています。

なぜ温暖化かというと、雨が増える。だって、水の量が増える、雨の元が雲、雲の元は何か、水蒸気です。水の分子が押されて、水蒸気、気体の分子になって、空気中に逃げていくんですね。これが雲の元で、雨の元になります。

水蒸気というのはやはり空気の温度が高いほどいっぱい空気の中に含まれます。この空気を温めるというのは太陽の光で

すね。水蒸気が上昇気流で空の高いところへ上がっていき、やがて、雲の粒になり、水に戻るわけです。上空に寒気があると、この上昇気流はより激しくなる。どんどんと雲は縦に縦に下がっていく。これが積乱雲です。高いところはマイナス何十度とか、氷の粒がいっぱいあるんですが、これが周りの水蒸気でボンと吸い上げる。どんどん重くなってくる。ある程度重くなると、上昇気流に近づいて地上に降ってくる。それがひょうですね。群馬県でも、ひょう害で17億円ぐらいの農産物の被害が出ています。

南太平洋のほうで暖かい海の上で積乱雲が発生すると、それがやがて集まって、台風になります。この台風が、積乱雲の固まり、これがやってきて災害に結びつきます。洪水になったり、駐車場が水浸しになったり、不幸にも人が死んでしまったりします。生命と財産の消失。それを防がなければならないということで、我々は身近な気象情報を利用して、災害から身を守る必要があるわけです。

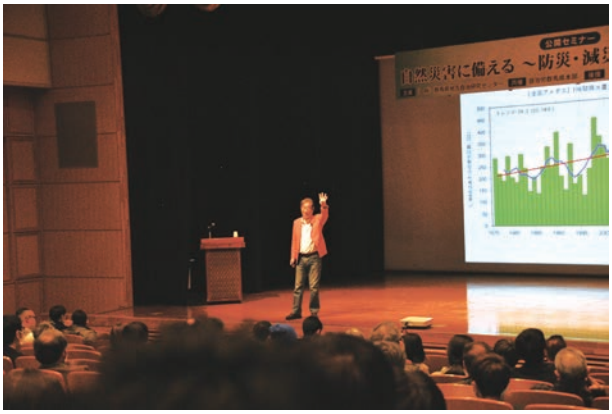
これら2015年から始まった新たなステージの防災に入っていきます。これは今までも皆さんも何か上から言われて、ああ、逃げるんだなという、そういう古い考えを捨てて、新たなステージの防災へ移ってくださいということで、簡単にお話しします。

まず最初にハザードマップの確認。国土交通省をパソコンとかスマホで見ていただきたいんですが、ハザードマップポータルサイトがありまして、そこに「重ねるハザードマップ」があるんですね。要するに、いろんな災害を1枚の地図の上に重ねて表示することができるわけです。例えば「洪水」となると、何メートルぐらい水が来るのかというのが色で示されるんですね。「土砂災害」、そうすると、あの辺りが危険です。警戒区域、特別警戒区域が黄色やオレンジで出ます。このポータルサイトのハザードマップにはもう一つ機能がありまして、これを3D化することができる。よりリアルに分かる。こういうものを利用して、御自分のおうち、住所を入れると、警戒区域の近くあったりするのか分かります。

これをやって、自分の家が危険なのか、水浸しになるのか、崖が崩れてくるのか、来ないのか。来るなと思った途端、次にしなくちゃいけないのはキキクル。これは気象庁が昔、危険度分布と言いました。じゃあ、このキキクルはどういうことかというと、何でもないときは白です。危険が迫ってくると、地図がだんだん色が塗られてきます。今、ほんの僅かに浸水被害がここにちょこっとね。高崎のこっちのほう、川のところがちょっと、ちょっと危ないよという注意の黄色が出ていますが、色が赤、紫となるに従って、危険度が増えます。これが今度、避難のときの指標になるわけですね。黄色は注意、赤は警戒、紫は危険です。実は気象庁は、避難情報を出す権限がないんです。あれは自治体が出すものなんです。避難指示。気象庁は、避難指示を出す自治体にデータを渡すだけなんです。実質、気象庁のほうが情報は早いわけですから、気象庁のキキクルを見て、御自分の家が紫になっていたら即避難。紫になったら全員避難ですよということで、キキクルの紫、もうこれは避難指示と同じなんだと思って、自ら避難を判断してほしいということなんです。

皆さんは、ハザードマップを見ることもできるし、それから、キキクルも学びました。まず安全か危険か、危険になりそうだという判断になった場合に、今度は災害が差し迫ってきます。キキクルを見て、今、逃げる、もう少し様子を見るという判断を自らしてくださいというこ

とが、今、2015 年から変わった新たなステージ。今までみたいに、お上から言われたようにすればいい、言われないからしなくていいじゃないということですね。そこで大きく変わったんです。




そして、もう一つあります。ハザードマップ、そして、キキクル。3 番目、三本柱のもう一つが「マイ・タイムライン」です。避難経路などを書いておく地図を「マイ・タイムライン」と言います。マイ・タイムラインは何かというと、東京のことはこんなこと書かれて、何日前からこんな情報が出たりして、さあ、あなたはこの日、何をしたらいいでしょうみたいなことを、シールまでついていたりして、貼ったりして、自分で書き込むという。なかなか厄介。でも、やっておくと助かる。どういうことか、要するに、間に合うように逃げるにはいつから準備を始めればよいか。それを逆算して、あらかじめ計画を紙に書いておく。例えば、じゃあ、避難するために、避難所に持っていく持出し袋、昔、買ったな。それを一生懸命探してみる。非常食も食べられないし、それから、乾電池も切れている。ああ、雨の中、乾電池を買いに行かなきゃいけない。これが 2 日前だったらまだお天気が崩れていない。何の気なしに買物に行けるんですよ。でも、1 日待ったがために、雨になったから買いに行けない。雨風が強くなってきて、台風が上陸しましたという段階で騒いだら、ああ、全部古いとなったときに、雨風の中にわざわざ乾電池を買いに行く暇はない。着の身着のままになってしまう。それでは駄目だということで、2 日ぐらい前から、まずなかったら買いに行く。準備をして、さあ、いよいよ来るかなと、いつのタイミングで避難しようかなとニュースを見るような、全部準備をしてということができる。とにかく間に合うように逆算して、何をしたらいいのかを書いておく。これがマイ・タイムライン。

ということで、2015 年、気象庁と国土交通省が防災にかじを切ったのが、新たなステージに対応するためにはまずハザードマップの確認、キキクルを確認、そして、マイ・タイムラインをつくる。この 3 つの柱ですね。これを上から言われるんじゃなくて、自分からやろうという、そういうことをしてくださいというふうに時代の流れが変わってきている。

さあ、もう今からやることは分かりますよね。本来は、災害は、風水害だけじゃなくて、地震もあります。私は、今回は、この水害に特化してお話をしました。やっぱり地震も怖いですよね。風水害も怖いんですけど。怖いこととか厄介なことは、人間は目をそらすという本能があります。正常性バイアスと言うのかな。例えば、皆さんも経験あると思うんですが、学校の頃とか、あるいは大きな施設にいるときに、ジリーン、ジリジリーンとベルが鳴る。けれども、わーっと言って逃げ出す人はまずいません。なぜか。みんな、何かの間違いじゃないか。訓練かなとか。まだ煙も何もないから大丈夫だというふうに勝手に自分に都合のいいように考えて避難しない。本当だったら危険なんです。ですから、目をそらさないで、怖がらずに対応できるような準備をこれからしていただきたいということです。

ちょうどお時間になってしまいました。

「気候変動からみる自然災害～今あなたに知ってほしい気象のあれこれ～」で、３つお話をいたしまして、今回はこれで終わらせていただきます。御清聴ありがとうございました。

【司会】　木原様、ありがとうございました。一人一人の準備が大事だということを改めて教えていただきました。群馬はあまり災害が多くないので、危機意識が薄いんですけども、今日からもうハザードマップの確認とか、早速お家に帰って、皆さん、していただけると、今日のお話がすごく役に立つと思います。

## 講 演「知っておきたい防災・減災 ～ ここでしか聞けない国崎流防災術 ～」

危機管理アドバイザー　国崎信江氏

【司会】　続きまして、国崎様より御講演いただきます。国崎様は、20 年にわたり、防災、防犯、事故防止対策を提唱されています。行政、企業、マンションなどのリスクマネジメントコンサルを行い、省庁の検討・審査委員や自治体の防災アドバイザーなどを務めておられます。ＮＨＫラジオでは、10 年間、マイあさラジオ「暮らしの危機管理」のコーナーで情報提供するほか、多くのメディアで、被災地の支援活動時の経験や、防災、防犯、普及啓発を発信、御活躍しておられます。

それでは、国崎様、よろしくお願いいたします。

【国崎】　私からは、地震の話をしたいと思います。私は、たくさんの防災講演会を全国津々浦々しておりますけれども、今日は皆様に伝えたいのが「命を守るには自助である」ということです。

能登半島地震では、発災直後から、市の職員の方々が、たくさんの電話を受けておりました。その受電中、「助けてくれ、今、家に押しつぶされていて、隣の部屋にいるばあさんが閉じ込められていて、お互い動けない。早く助けてくれ」。市の職員の方々は、すぐに消防や警察に救助要請をお願いしました。市の職員の方々は、警察や消防に救助要請を伝達したら、彼らが必ずもう現場に向かっていると思います。

それから 24 時間後にまた電話がありました。少しか細い声で、「まだか。まだ来てないぞ。何でこんなに時間がかかっているんだ。もう１日たったぞ、いつ来るんだ。隣のばあさんの声も聞こえない。恐らくばあさんは逝っちまった。早く来てくれ」。

結果として、その御夫妻は御遺体で発見されました。なぜ行けなかったのか、お分かりですか。

実は、皆様もお聞きになったと思いますけれども、発災当日、元旦に、「津波です、逃げて、早く逃げて、高台へ」というようなアナウンスがありましたけれども、津波警報が解除されるまでは消防も警察も現場に入ることができないんです。そして、当日は激しい揺れがありました。この激しい揺れの最中に、こういった現場に入ることはできないんです。なので、仮に、目の前に、消防や警察の方、また

は自衛隊の方がいたとしても中に入ることができない。声を聞いて、励ますことしかできない。

これが市民と行政とのギャップなんですね。市民の皆さんは、困ったことがあったときに行政に電話をします。電話をして、うまいことつながったら、これで助けてくれると思う。

ですので、自分の命は自分で守るということで、まず最初にしていただきたいのが建物の耐震性です。

私たちは、これからの災害を考えるにあたり、防災グッズをそろえるのではなくて、それよりもまず最初に、命を守ることに向き合うということが大事です。でも、命を守ること、耐震性については、群馬には地震が来ないから、前橋市には来ないよと思っていれば、そこにかけるお金がもったいない、惜しいということになるんでしょう。

ところが、ここで地震が来るなんてみじんも思っていなかったというところにことごとく大地震が発生しております。ここには地震が来ないなんていう考え方をやめて、日本に住む以上、いつ大規模の地震が起きてもおかしくないんだという、地震大国日本に住む覚悟を持つ必要があろうかと思います。

それからもう一つ、群馬の痛いところ。津波防災教育に力を入れていない。ここは内陸だから津波は来ないから大丈夫と親や先生方が思っていれば、子供たちも、そういうものなんだ、自分たちには関係ない、ここに住んでいてよかったということにもなるんでしょう。

この海洋国家島国に生まれて、どこに住んでいようと、津波の危険性を知って、いざとなったらどのように行動するのかということを等しく学習しておくということが大事です。むしろ、前橋、群馬だからこそ、津波の防災教育をしっかりやっていかないと、日頃、海に慣れていないだけに、異常に気づきにくいかもしれない。こんな危機感を持って、防災教育をしていく必要があるように思います。

我が国では地震が来たら机の下、テーブルの下に潜れというふうに教育を受けているものですから、耐震性があるなしという条件にかかわらず、とりあえず机の下に潜れば大丈夫だろうと思われがちですが、皆様はどう思いますか。耐震性が低い家で、テーブルの下に潜ったとして、命は守られるのかということを考えていただきたいと思っております。

耐震性があるかないかで、行動が変わるということ。そして、本気で耐震化を考えれば、これほどの価格でできるということも知っておいていただいて、皆様が、高いお金がかかるのがいやだ、と言うのであれば、高知県黒潮町の事例のように 10 万や 15 万だったらやってもいいなと思うならば、皆さんから声を上げて、10 万、15 万の自己負担でできるように、県、国に、皆さんから声を上げていくということが制度を変えていく一歩になると思います。

耐震性が高ければ、そこで生き埋めになる人がいなくて、生き埋めになった人を救助するという、その手も必要なく、その家の瓦礫が道路をふさいで、道路が閉鎖状態になるということも防げて、緊急車両が通れて、住民も避難することが

**暮らし方で安全性は変わります**

**家具と家電製品は**
**できるだけ減らして**
**全てを固定して**
**生活雑貨類は柔らかい素材で**
**安全な部屋を目指す**

できて、しかも、輪島市のように１軒の火災がまちを延焼させてしまうということも、初期消火することによって防げる。つまり、一人一人が耐震化することによって、災害時の被害を軽減することができることを知っておいていただきたいです。私は、防災対策の一丁目一番地は自宅の耐震化であると思っております。

そして、我が家の話をしますと、家具と家電製品はできる限り減らす。お金をかけて凶器を増やさないということを意識しておりますし、もうこれ以上減らせないといった残った家具をしっかりと固定して、そして、固定できないものはできるだけ柔らかい素材のものを選び直しました。

例えばかけ時計が我が家では紙製です。目覚まし時計もシリコン製、それから、花瓶もゴム製、写真立ても、ガラス製のフレームから紙製に変えました。そして、照明も和紙だったり、ごみ箱はアクリル性であったり、とにかく飛んできて、それが当たって、体がけがすることがないように、家にある雑貨類、固定できないものは全てフニャフニャの柔らかいものにしております。そのように安全性と飾る、その両面を両立できるようにしております。

我が家は中身の飛び出し防止対策として冷蔵庫や、全ての引き出しに飛び出し防止のストッパーがついています。家の中で一番危険なのはキッチンです。キッチンにいたら、１秒でキッチンから出るということを意識してください。そして、キッチンの次に危険なのは子供部屋です。なぜか分かりますか。

まずキッチンの話をしましょう。なぜ危険なのか。あれほどの狭い間取りに大型の家電製品である冷蔵庫があって、大型の家具である食器棚があって、そして、刃物を扱って、火を扱って、食器、ガラス、陶器の割れ物がいっぱいひしめいていて、いろいろな調味料もあります。それが漏れて床を濡らしたらそこで滑ってしまう

## 停電、断水で最も困る物もしっかり備える

ということもあるでしょう。あれだけの狭い空間で、これだけの危険が詰まっているところはそうそうないと思います。なので、キッチンで閉じ込められたり挟まれたりしないように、１秒でそこを出るということを意識してください。

次に、なぜ子供部屋が危険なのかというと、子供はそこで寝る、そこで学ぶ、そこで遊ぶというように、多目的なことを一つの部屋でするので、当然のことながら、家具も多くなりますね。できるだけ家具を置かないようなそんなレイアウトを考えておかれるといいと思います。

そして、ここからようやくグッズの話になります。皆様におかれましは、備えとして、10 日分ぐらいは用意されるといいと思います。そして、ポータブル電源も用意したらいいと思います。とにかく電気がなくて困ったということがありますので、ポータブル電源。それから、非常持出し品は、１人１つ。私は、リュックではなくて、ポケットがたくさんついた防災ベスト、エマージェンシーベストをお勧めしていますけれども、留守でいない家族の分まで持っていくということがないように、１人１つ、自分の分を持っていったらいいと思います。

被災すると本当につらい避難生活になりますので、心のケアを含めて、自分で避難所を選ぶということも考えていただきたい。指定避難所に行かなくてはならないということではありませんから、親族や友人、お金はかかるけれどもホテル。ホテルはお金がかかるけれども、我が家のように防災貯金を毎月 3,000 円していたら、10 年で 36 万近くなる。だとしたら、ちゅうちょせずにホテルに泊まることもできるでしょう。こんなこともコツコツやっていただいたらと思います。

最後ですけれどもスマホを利用している方は、防災アプリを入れてください。お勧めは、My SOS、Coaido119 です。地域の方に助けてもらおうというのもいいと思いますが、近くにいないことも考えて、この番号を押せば、同じアプリをダウンロードしている人が助けてくれる。119 番でも同時に通報してくれます。こんなアプリを入れておくと本当に心強いです。

ということで、これで、私の話を終わりにしたいと思います。長い間、御聴講いただきまして、誠にありがとうございました。

【司会】　国崎様、ありがとうございました。自分で自分の身を守る大切さを、実際の能登地震のお話を交えて学ばせていただきました。そして、私たち一人一人の備えが大切だなということを学びました。

## 非常持出し品は「一人一つを備える」

必要な物は着て運ぶ
　⇒玄関のコート掛けにおけばすぐに手に取れる
自分に必要な物は自分で着て運ぶ
⇒家族の分まで持つのは負担が大きい

**エマージェンシーベストの特徴**

- 機能的なポケット
- 多くのポケットで収容力がある
- 口を覆える　台風でもフードが脱げない
- タブレットやノートパソコンを持ち運べる
- 椅子の背もたれなど身近における
- 動きながら必要なものを取り出せる
- 貴重品は着ていることで盗まれにくい
- 体を保護できる

## 防災貯金のススメ

災害時にホテルや食料を購入するための防災貯金があれば

**被災生活も安心!!**

## 対 談「自然災害に備える～防災・減災のキホンとその準備～」

気象予報士・防災士　木原　実氏
危機管理アドバイザー　国崎　信江氏
司　会　田中美貴子氏
（自治労群馬県本部書記次長）

【司会】　前半では、木原様、国崎様それぞれから貴重なお話をいただきました。後半では、お二人の対談ということで、幾つか質問をこちらで御用意しました。また、休憩時間にはたくさんの御質問をいただいております。一部になってしまいますが、できる限り御紹介して、お二人からいろいろなお話を伺いたいと思います。

近年、全国各地で自然災害が増加しています。群馬県は比較的災害がないと言われておりますが、どうしたら自治体の役割を果たすことができるか。自分で自分を助ける意思を持ってもらうにはどうしたらいいか、という御質問をいただいております。

そこで、改めまして、危機意識を高めるために何を意識すればよいと思われるか。また、意識の高い方々や地域の取り組みなど、事例やアイデアがございましたら教えていただきたいと思います。

【国崎】　そうですね。防災意識を高めるというときに、私自身は、被災地の映像を見て、自分の家がこのように崩れたらどうしようとか、もし、被災地で亡くなったという話を聞いて、自分の息子が亡くなったらどうしようかということで、自分の家が被災、それから、家族が災害で亡くなるというところをイメージしながら真剣に災害を考える、防災を考えるようになったんですね。

そうなるためには、やっぱりこういった啓発の話を聞いたりというように、誘って、自分で話をするとなかなか耳をかしてくれなかったりするので、共に学ぼう、共に聞こうみたいなスタンスで声をかけて、こういった会に呼んでいただくといいのかなというふうにも思っております。結局は本人の気づきが大事ですよね。

【木原】　私の住んでいるところに地域の防災士会という会がありましてね。近々、消防のほうの体験というか、訓練があるから参加してくれと言われまして、行きまして、そこでやっぱりスタンドパイプですね。実は地面の中に、消火栓が埋まっているんですよ。蓋があるんですけど。開けて、スタンドパイプを差し込んで、そこにホースをつけて、それで元栓を開けて、そうすると、そこから消火用の水が出るんです。そんなのって行かなきゃ知らない話で、行って初めて体験をすると、ああ、そうすると、うちの近くに、それ、あるのかなと思って探すんです。そうすると、玄関から４メートルぐらいのところに、スタンドパイプの消火栓があるんですよね。

ということは、何か起きたときに、じゃあ、スタンドパイプさえあれば、大体ああいうのは公園とか防災倉庫に入ってい

て、それを持ってくれば、近所の火事は消せるんだということに気がつくわけですよ。

きっかけは、地域の訓練。近所だから、割と顔見知りがいたりすると、話し弾んで、それこそ、「おたくはあれ、家具、どうなってるの？止まってるの？」とか、「ペット、どうするの？」とか、そういう世間話みたいなところから小さなコミュニティーができるんですよね。そのきっかけがやっぱり年に何回かの訓練、消火訓練とか、そういうのをきっかけに、その後、茶飲み話で少し広げるといいです。

災害って、みんな苦労は同じだと思うんですよ。顔が分からないと、他人ばかりだったら怖いじゃないですか。だったら、取りあえず擦れ違ったら、目をそらすんじゃなくて、「どうも」とか。一番便利なのは天気の話題です。「雨が降りそうですね」、「昼から降るって木原が言ってたよ」とか、何かそんなことで、話すだけで、次に会ったとき、気が楽なんですよ。ちょっと会釈か、ちょっと声をかけるというところから、自分の近所、そういうところから顔の分かるお付き合いをしていくと、それは防災活動にもつなげやすいという体験はありますね。

【国崎】　そうですね。顔見知りになって、お天気以外のことまで話せるような仲よしになって、ちょっと災害が起きたら、お互いに助け合えますねみたいなところまで話ができたらいいですよね。

【木原】　そうですよね。災害にかかわらず、地域のコミュニティーって、昔そうだった。いつの間にかそういうのが薄くなっちゃって、何かみんな疑心暗鬼になってね。隣の人を見ると、変な人じゃないかみたいな。話してみれば、何のことはない、みんな一緒なんですけど、そういうようなことにまた戻していかなきゃいけないんじゃないかなという気がしますね。

【司会】　ありがとうございます。そうですね。コミュニティー、顔見知りだと、本当に助けてと言いやすかったりしますし、防災というと、ちょっと気が重いけど、本当に軽い気持ちで入っていただくというのはすごくいいなと思いました。

続いての御質問ですけれども、備える物、グッズですね。具体的にお二人がいつも備えていらっしゃる防災グッズとかありましたら、ぜひこの場で御紹介いただきたいんですが。木原さんからお願いします。

【木原】　防災ポーチを持って歩くというのを習慣づけてます。子供のお弁当箱ぐらいの大きさなんですけどね。これぐらいだと、持って歩いて、そんな重くもないし、邪魔にもならないし。

【国崎】　何が入っているんですか。すごく気になります。

【木原】　パンドラの箱で、開けると閉まらないんです。今日、思い切って開けますよ。まずは懐中電灯ですね。電池式です。それから、ラジオ。情報収集にもなる。何かあったときに役に立つサバイバルナイフですね。それから、これはサバイバルペンチ。ペンチですけども、こっちを開けると、ナイフが出たりとか、ドライバー。いろいろ。それから、アルミシート。サバイバルシートと言われる防寒用のね。これはレインコート。あとマスク。それから、軍手。あとは手ぬぐいです。

それから、携帯トイレ。あとは、いわゆるバンドエイド系があったり、レジ袋を小さく畳んで入れています。あとは三角巾とか、よく言われる基本ですね。あとは、薬、自分用です。あとは火おこしです。キャンプ用の。まあ、これぐらい。

これは、実は人それぞれで、パーソナルで、何が入っているか違うんですよ。ですから、例えばナイフは要らないとか、それから、サバイバルシートは要らないとか。そうですね。僕はこうです。

【国崎】　じゃあ、それを一生懸命また元に戻して、入れていただく間に、私の説明をさせていただきます。先ほど講演の中でも話をさせていただいた、これがエマージェンシーベスト。私はリュックを持っていない理由というのは、これまで被災した、特に地震で、一刻の猶予もなくて、逃げなくちゃいけないといった人たちは、リュックを背負って逃げる心理状態にはならないということなんですね。すぐに逃げなくちゃいけないというときに、物を持ってきて背負うというよりは、目の前にあるもの、特に着るものなんですけど、何か１枚、手に持って逃げるという方がとても多かったんですね。

なので、どうせ１枚持っていくんだったら、そこに必要なものを入れておいて、着て逃げるというベスト。リュックだと、けがした人を背負えないけれども、これだったら背負えるし、それから、リュックだったら全速力で走れないんだけれども、着ていれば全速力で走ることもできる。これだったら、このように着ているので、盗まれないという機能性を持っている。それで私はこれを勧めています。

私は、日頃から自分のかばんの中に、とにかく外出したときに必要なものを入れています。エマージェンシーベストに入れているものもほぼ同じなんですけれども、まずこれは必ず入っています。ソーラーシート。発電しながら歩くという。今回の能登半島で本当に役に立ちました。

それから、これですね。ヘッドライト。ライトもいいんですけど、私はやっぱり災害時に両手を使いたいということがあって、こういったヘッドライトを用意しています。

それから、ゼリー飲料ですね。それから、止血エイド。それとあと、やっぱりトイレですね。紙パックのトイレ。それから、こういった除菌シートですね。それから、黒いビニール袋を用意しています。45リットルの大きいごみ袋。これは何かというと、帰宅困難になったときに、地面が汚れているときに、これは敷物になりますし、襟ぐりを切れば、カッパの、レインコートの代わりにもなるし、寒さ対策とか。あと、この中でトイレをすることができるんですよ。簡易トイレの代わりとか、給水袋とか、いろんなことに使えるので、この黒い袋は用意しています。こんな感じですかね。

【木原】　最後に一つだけ。これは万が一ですけど、もしかして、万が一、火災になったとき、一酸化炭素中毒で亡くなった方が非常に多いんです。数十メートル先に出口があっても、途中で一酸化炭素を吸うと死に至るんですけども、これは一酸化炭素を吸わないで避難するための透明なごみ袋。頭からかぶる。専門のものなので視界もよく、目も煙で痛くならない。

【国崎】　今、かぶっているのは、気をつけなくてはならないのは、高温に耐えられる耐熱ごみ袋なんですね。これを間違って、家にある普通の袋でしてしまうと、耐熱ではないので、逆に熱で溶けて息ができなくなっちゃうので御注意ください。

【司会】　今回は自治労群馬県本部共催ということで、多くの自治体、市役所や